

序章 分析対象資料及び用例収集のための前提

1) 分析対象資料一覧

分析の対象とした資料の一覧を示す。成立年代順に配列する。

《 》は、用例を示す際に使用する略号であることを示す。

- 01、《翻訳》語音翻訳（1501）…『海東諸国紀』 掲載のハングル資料
- 02、《碑文（玉殿）》たまおとんのひもん（1501）…仮名資料
- 03、《琉館》琉球館訳語（16世紀前半成立か）…『華夷訳語』の一つとしての漢字資料
- 04、《碑文（石東）》石門之東之碑文（国王頌徳碑）（1522）…仮名資料
- 05、《碑文（石西）》石門の西のひもん（真珠湊碑文）（1522）…仮名資料
- 06、《田名1》田名文書第1号（1523）…仮名資料
- 07、《碑文（崇寺）》崇元寺之前東之碑うらの文（1527）…仮名資料
- 08、《おも1》『おもろさうし』巻一（1531）…仮名資料
1709年11月原本焼失。1710年7月再編
- 09、《陳使》陳侃『使琉球録』中の「夷語」（1534）…漢字資料
- 10、《田名2》田名文書第2号（1536）…仮名資料
- 11、《田名3》田名文書第3号（1537）…仮名資料
- 12、《田名4》田名文書第4号（1541）…仮名資料
- 13、《碑文（かた）》かたはなの碑おもての文（1543）…仮名資料
- 14、《田名5》田名文書第5号（1545）…仮名資料
- 15、《碑文（添門）》添継御門の南のひのもん（1546）…仮名資料
- 16、《田名6》田名文書第6号（1551）…仮名資料
- 17、《碑文（やら）》やらさもりくすくの碑のおもての文（1554）…仮名資料
- 18、《田名7》田名文書第7号（1560）…仮名資料
- 19、《郭使》郭汝霖『使琉球録』中の「夷語」（1561）…漢字資料
- 20、《田名8》田名文書第8号（1562）…仮名資料
- 21、《田名9》田名文書第9号（1563）…仮名資料
- 22、《音字》周鐘等『音韻字海』中の
「附録夷語音釈」「附夷字音釈」（1572頃）…漢字資料
- 23、《蕭使》蕭崇業『使琉球録』中の「夷語」（1579）…漢字資料
- 24、《田名10》田名文書第10号（1593）…仮名資料
- 25、《碑文（浦城）》浦添城の前の碑おもての文（1597）…仮名資料
- 26、《田名11》田名文書第11号（1606）…仮名資料
- 27、《夏使》夏子陽『使琉球録』中の「夷語」（1606）…漢字資料
- 28、《碑文（よう）》ようとれのひのもん（1609）…仮名資料

- 29、《おも 2》『おもろさうし』巻二（1613）…仮名資料
1709年11月原本焼失。1710年7月再編
- 30、《おも 3》『おもろさうし』巻三～巻二十二（1623）…仮名資料
1709年11月原本焼失。1710年7月再編
（編集年次不明の巻11、巻14、巻17、巻22も「1623」に準じるものとする。）
- 31、《碑文（本山）》本覚山碑文（1624）…仮名資料
- 32、《田名 12》田名名文書第12号（1627）…漢字仮名混じり資料
- 33、《田名 13》田名名文書第13号（1628）…漢字仮名混じり資料
- 34、《田名 14》田名名文書第14号（1631）…漢字仮名混じり資料
- 35、《田名 15》田名名文書第15号（1634）…漢字仮名混じり資料
- 36、《田名 16》田名名文書第16号（1660）…漢字仮名混じり資料
《田名 12》～《田名 16》に関して、用例としては仮名のみを採用する。
- 37、《君由》『君南風由来并位階且公事』（1700頃）…仮名資料
- 38、《仲里》『仲里旧記』（1703頃）…仮名資料
- 39、《混験》『混効験集』（1711）…仮名資料
- 40、《琉由》『琉球国由来記』（1713）…仮名資料
- 41、《組五》玉城朝薫「組踊五組」の脚本〈「護佐丸敵討」「執心鐘入」「銘苅子」「孝行之巻」「女物狂」〉（1718頃）…仮名資料
- 42、《中信》徐葆光『中山伝信録』中の「琉球語」（1721）…漢字資料
- 43、《具志》『具志川間切旧記』（1743）…仮名資料
- 44、《琉見》潘相『琉球入学見聞録』中の「土音」（1764）…漢字資料
- 45、《琉訳》李鼎元『琉球訳』（1800頃）…漢字資料
- 46、《漂録》『琉球・呂宋漂海録』中の「言語」「琉球」語（1818）…ハンゲル資料
- 47、《刈》クリフォード『琉球語彙』（1818）…アルファベット資料
- 48、《ハッテ》ベッテルハイム『琉球語と日本語の文法の要綱』（1849）・『琉球語辞書』（1852）…アルファベット資料
- 49、《沖話》『沖繩対話』（1880）…仮名資料
- 50、《チェン》チェンバレン『琉球語文典』（1895）…アルファベット資料
- 51、《官話》「琉球官話集」（19世紀？）…仮名資料
- 52、《沖辞》『沖繩語辞典』（1963）…（アルファベット資料）

2) 「動詞」の捉え方

（単語、形態素、助辞、接辞等について）

「動詞」の用例を収集し、それに考察を加えるというのだが、「動詞」とは何か。このように正面切って言わずに、普通に考えられている「動詞」であり、これから提示する全てのもの（用例）がそれであるということも可能であろう。しかし、そうしたとしても用例収集のための前提、あるいは拠り所のようなものがなければなるまい。そのことについて少々触れておきたい。以下は、多和田（2006）で述べたことをもとにしている。

「事物の動作・作用・状態・存在などを表す語」が「動詞」であるとするが、この「語」（単語）が、自明のことのようにでありながら、いざ定義するとなると、容易に解決できない種々の問題を含み、取り扱いが難しい。それで、「日本語には、言語の基本的な単位である単語の定義をめぐっての共通理解がいまだに得られていない」^{注1)}と述べられたりもする。

そこで、その前後から迫っていくことによってその対象を鮮明に浮かび上がらせようとすることになる。「単語」とはこのようなものと緩やかに認定しておいて、分析を進めつつ、最終的にめざすものはこれであったとする手法である。実例を提示しながら概念化を図っていく方法であると言ってもよからう。

ここでは、単語を「一定の形式と意味とをもった自立性のあるまとまり」とし、「動詞」に関してこの方法を取ろうとしている。

単語の内部構造・構成に主眼をおいて研究する「形態論」の単位たる「形態素」を「最小の意味単位」と簡潔に定義し、（沖縄語）動詞の（通時的）考察を行おうとするものである。

語構成や語形変化などの観点から、形態素を次のように分類する考え方を援用する。^{注2)}

- (1) 語基 (base)= 合成語を作る要素となる比較的自立性の高い形態素で、語形成上の単位となる。
- (2) 語幹 (stem)= 同一の単語の文法的な語形を構成する活用上の単位で、変化しない部分である。
- (3) 付属辞 = 自立性の低い形態素である。接辞、語尾、助辞に分類される。
 - ①接辞 (affix)= 語基と結合して派生語を作る。接頭辞 (prefix)、接尾辞 (suffix) が多いが、接中辞 (infix) もある。
 - ②語尾 (ending)= 語幹につく形式で、語形変化をする単語の変化する部分である。（屈折辞とする場合もある。）「学校文法」の「助動詞」の多くはこれに属すると言える。
 - ③助辞 (particle)= 語基あるいは語幹+語尾につく形式で、単語性の高い付属辞である。「学校文法」の「助詞」の多くはこれに属すると言える。

「助詞」「助動詞」を単語とするか否かによって、分析の違いが出てくることになる。「暑さのせいで、冷たいものばかり飲んでいきます。」を例にして説明しよう。

まず、形態素分析をして、上記の分類をあてはめてみる。（下記の /ser-/、{SER-} における「-R-」は「長音」を意味する。）

| /acusa-no/ | /ser-de/ | /cumeta-i/ | /mono-bakari/ | /non-de/ | /i-mas-u/ |
|------------|----------|------------|---------------|----------|-----------|
| {ACUSA-NO} | {SER-DE} | {CUMETA-I} | {MONO-BAKARI} | {NON-TE} | {I-MAS-U} |
| (1) ③ | (1) ③ | (2) ② | (1) ③ | (2) ② | (2) ① ① |

「助詞」「助動詞」を単語と認めるか否かによって、次のような三つの立場の違いができる。

- A. 暑さの□せいで□冷たい□ものばかり□飲んで□います
（助詞も助動詞も認めない立場）

B. 暑さ□の□せい□で□冷たい□もの□ばかり□飲んで□います

(助詞は認めるが、助動詞は認めない立場)

C. 暑さ□の□せい□で□冷たい□もの□ばかり□飲んで□いで□います

(助詞も助動詞も認める立場)

Aの立場からすると、「行かせられなくなかったようだったそうですね」は、一つの単語ということになるのであろうが、そうするには抵抗感が生じるはずである。その感覚はどこから来るのか。

上記の例文でもわかるように、「単語」としての固まり具合を「茹卵」の譬えで言うると以下のようなだろう。つまり、「助辞」は「接辞」より自立性が高いが、「単語」とはならず、あたかも「半熟」のような存在なのである。さらに言えば、「半熟」に程度の差があるように、「助辞」にも幅がある。



図 1

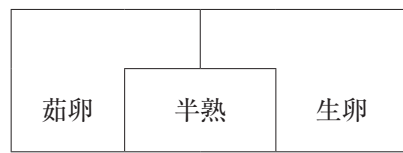


図 2

さっきの抵抗感の原因は、この「半熟」的存在の「助辞」にあるように思われる。(本書では、Bに近い立場を取る。)

因みに、上記の例文に対応する沖縄(現代)語^{注3)}は次のようである。

暑さのために、冷たいものばかり飲んでいきます

/ʔaɕjisanu tamini hizjurusaru mu'nɓik'e'e'i nudo'o'jabii'n/

| /ʔaɕjisa-nu/ | /tami-ni/ | /hizjurusaru/ | /mu'nɓik'e'e'i/ | /nudo'o'jabii'n/ |
|--------------|-----------|----------------|-----------------|------------------|
| {ʔACJISA-NU} | {TAMI-NI} | {HIZJURUSA-RU} | {MU'N-BIKE'E'I} | {NUDO'O-'JABI'N} |
| (1) ③ | (1) ③ | (2) ② | (1) ③ | (2) ① |

再び「動詞」に立ち返って、補いをしておきたい。

亀井孝・河野六郎・千野栄一(1996)『言語学大辞典 第6巻 術語編』(三省堂)に「動詞は、行動や動きの概念を示すだけではない。何か別の要素が必要である。」とあり、次のような項目が並ぶ(説明文、省略)。

[動詞の統語機能]

[動詞に関わる文法範疇]

- 1) 人称(person)・数(number) 2) 時称(tense) 3) アスペクト(aspect)
- 4) 態(voice) 5) 法(mood) 6) 性(gender) 7) 去来相(orientation)

[述語の中核としての動詞]

これらについて論じる意図はなく、用例収集の際に念頭に置くべき事柄として挙げるものである。

3) 沖縄語音韻の通時的变化の概要

「形態」について考えるためには、前提としての「音韻」を見ておく必要がある。多和田(2010)で述べたことをもとに(多少の補訂を加えて)、動詞の形態変化(活用)に関連するようという観点から、沖縄語音韻の通時的变化の概要を以下に記す。

カ行音 * / k i , k e , k a , k u , k o /

*/ki/は、16世紀終りあたりからその兆候はあるが、17世紀の初めごろ破擦音化して [tʃi]/tʃi/となる。

(注) [tʃi] : /tʃi/ ([tsi] : /ci/との関係で、このようにする。)

*/ke/は、16世紀の半ばごろ [ki]/ki/となる。それ以前、[kɨ]/kɨ/の時期があったと考えられる。

*/ka/は、[ka]/ka/のまま現代に到る。

/i/の後で口蓋化したが、それが破擦音化するの18世紀の終りごろかと思われる。

*/ku/は、[ku]/ku/のまま現代に到る。

*/ko/は、16世紀に入って間もなく [ku]/ku/になった可能性が高い。

ガ行音 * / g i , g e , g a , g u , g o /

*/gi/は、17世紀の初めごろ破擦音化して [dʒi]/tʃi/となる。

*/ge/は、16世紀の半ばごろ [gi]/gi/となる。それ以前、[gɨ]/gɨ/の時期があったと考えられる。

*/ga/は、[ga]/ga/のまま現代に到る。

/i/の後で口蓋化したが、それが破擦音化するの18世紀の終りごろかと思われる。

*/gu/は、[gu]/gu/のまま現代に到る。

*/go/は、16世紀に入って間もなく [gu]/gu/になった可能性が高い。

(注) [dʒi] : /tʃi/ ([dzil] : /zi/との関係で、このようにする。)

タ行音 * / t i , t e , t a , t u , t o /

*/ti/は、16世紀の初めには破擦音化して [tʃi]/tʃi/となっていた。それが現代に到る。

*/te/は、16世紀の初めには [ti]/ti/であったが、16世紀半ば以降 [ti]/ti/になった。それが現代に到る。

*/ta/は、変わらずに [ta]/ta/である。

/i/の後で口蓋化・破擦音化したが、16世紀初めには破擦音化していた。

*/tu/は、16世紀初め [tsul]/cɨ/であったものが、17世紀半ば以降 [tsi]/ci/となり、18世紀の初めごろから [tsi]/ci/に変わったと考えられる。それが19世紀末ごろまで続き、その後 [tʃi]/tʃi/になった。

*/to/は、16世紀の初めには [tu]/tu/となっており、それが現代語まで続くことになる。

ダ行音 * / d i , d e , d a , d u , d o /

*/di/は、16世紀の初めには破擦音化して [dʒi]/tʃi/となっていた。それが現代に到る。